



# 4月の漁況と海況 (内海側)

## ◎海況

1~2日大阪湾、3~4日播磨灘で実施した海洋観測結果によると大阪湾東部から中央部海域では表・中層10.1~10.9°C、底層10.6~11.4°C、南西部海域では各層11.0~12.0°Cを示してほぼ平年並の水温、又播磨灘では西部海域の鴨門口から家島群島にかけて各層9.0~9.4°Cの水温を示し平年比-1.0°Cその他海域では表・中層10.0~10.9°C、底層10.4~11.4°Cを示し平年並からやや高目に推移した。一方19~20日に実施の紀伊水道北部の観測結果では西部海域各層11.0°C台、中・東部では表・中層12.5~13.7°C、底層13.6~14.6°Cを示し、これらを平年に比較すると紀伊水道北部全域にわたって各層共2.0°C内外低目に 写しており本年春の水温上昇は10~15日程度おくれいている。

## ◎漁況 (概況)

前月まで漁況を呈していた各地先でのノリ養殖漁業は上旬に播磨地区の支柱養殖、又下旬には神戸西部、淡路地区の浮流養殖がそれぞれ終漁した。漁期は昨年より1旬程度終漁期が早かったが、県下全海域とも生産量は昨年に引続き好調だった。一方漁船漁業はノリ養殖地域では器材の取替などで依然出漁船が少ないが、その他の地域は水温上昇と共に次第に漁況を呈しはじめた。各海域での主な漁獲対象魚としては大阪湾北西部、明石海峡、龍ノ瀬周辺ではイカナゴ、アナゴ、アイナメ、カサゴ、カレイ、スズキなど、友ヶ島水道及びその南北海域ではアナゴ、小エビ、ハリイカ、タコ、カレイ、サゴシ、タイ、スズキなど、沼島周辺でタイ、メバル、エン、ウマズラハギなど、鳴門南北海域ではエビ類、カレイ、スズキ、イカ、アイナメ、タコなどとなっている。なかでも淡路岩屋地先、明石海峡でイカナゴ新漁を対象として操業中の込網網、船曳網漁業は本月に入り特に活況を呈しているのに対し淡路南部の小型底曳網は対象魚の転換期に当り不振が続いている。

## ◎各地

- (注、以下は1日1隻当り平均漁獲量、◎は1隻当り単価、何隻は操業隻数)
- ◎明石 浦
    - イカナゴバッチ網2,000~2,500キロ、◎(新仔)17~18円、(古瀬)30~35円、10隻。小型底曳網メイトカレイ7~8キロ、◎800~1,200円、ハリイカ10キロ◎400~500円、アイナメ(小)20キロ、◎800~1,000円、12隻。スズキ一本釣6~7キロ、◎1,500円(目廻り2キロ内外)20隻。
  - ◎岩 屋
    - イカナゴ船曳網5,000キロ内外、◎19円22統。イカナゴ込網10,000~12,000キロ◎19円9統。カレイ延網10~15キロ、◎1,200~1,300円、7隻。アナゴ延網30~40キロ、◎大450円、小300円、10隻。ワカメ採取(天竺)20キロ(干上げ)◎800~900円、30隻。アイナメ、カサゴ一本釣4~5キロ、◎アイナメ1,300円、カサゴ900~1,000円、40~50隻。
  - ◎由 良
    - 小型底曳網7~10キロ、◎400~500円、小エビ3~5キロ◎350~450円、ハリイカ4~6キロ◎600~700円、タコ4~7キロ◎600~700円、キス3~5キロ◎700~800円、メイトカレイ2~5キロ◎900~1,000円、フカ2~3キロ◎200円、雑魚10~15キロ、◎200~300円60隻。サゴシ一本釣5~10キロ◎500~600円、カサゴ、メバル一本釣7~10キロ◎700~800円、スズキ一本釣5~8キロ◎1,000~1,100円、タコ一本釣3~10キロ◎600~700円、各50隻。磯延網アカカレイ2~3キロ◎600~700円、メイトカレイ2~3キロ、◎900~1,000円、アイナメ5~7キロ◎900~1,000円、メバル、カサゴ4~7キロ◎600~700円、タコ2~3キロ◎500~600円、生貝2~4キロ◎800~900円25隻。延網アナゴ20~30キロ◎400~500円アカカレイ4~7キロ◎600~700円カサゴ10~15キロ◎600~700円20隻。天草採り100~150キロ◎30円5隻。
  - ◎沼 島
    - 小型底曳網ヒラメ5キロ内外◎2,000円、タイ2~3キロ◎2,300円、エン100~200キロ◎大150円小60円、ハリイカ50~7キロ◎600円、アナゴ2~3キロ◎500円、サゴシ10キロ◎70円、テナガタコ7キロ◎40円、35隻。タイ一本釣2~3キロ◎大2,200円、中2,000円、小1,500円、40隻。キス一本釣4~5キロ◎600円40隻。メバル一本釣20~30キロ◎600円10隻。エン一本釣20~35キロ◎150円、5隻。タコ一本釣5キロ◎大600円小300円、4隻。磯延網ウマズラハギ40キロ◎100~150円メバル、カサゴ5~7キロ◎450円、ハリイカ2~3キロ◎500円、20隻。サザエ20キロ◎350円、3隻。
  - ◎福 良
    - エビ漁網クルマエビ0.5~1キロ◎3,000円、カワツ3キロ◎1,500円、中エビ4~5キロ◎500円、小エビ3キロ◎300円、ハリイカ4キロ◎300円10隻。小型底曳網メイトカレイ7~8キロ◎500~600円、アイナメ、青シタ7~8キロ◎800~600円、20隻。スズキ一本釣5~6キロ◎850円目廻り1~1.5キロ◎130隻。メバル、カサゴ一本釣10キロ◎500円、12隻。

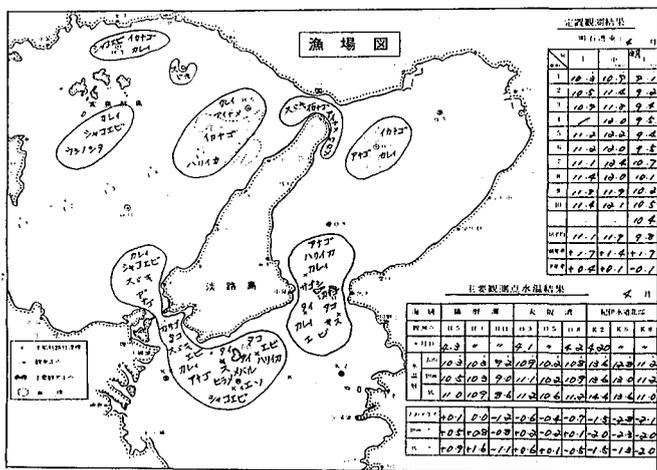
## ◎本月の特記事項

※明石瀬戸周辺のスズキ一本釣は昨年1日1隻最高100キロ、平均20キロの釣獲に対し本年6キロで約1/2以下、又沼島周辺のタイ一本釣も昨年同期の1日1隻4~5キロに対し2~3キロで約1/2といずれも大きく下廻っている。

※岩屋地先及び明石海峡周辺のイカナゴ新仔漁は播磨灘西部からの魚群添加などで昨年に引続き船曳網で1日1統当り5,000キロ、込網(好潮時)10,000~12,000キロの豊漁が続いている。

## ◎今後の見込み (タイ、サワラについて)

本年はタイ、サワラが紀南より内海への北上期(内海入込期)に黒潮流軸の潮離離接岸変動が続きまた流速も例年に比し弱く、従ってそれに伴う紀南分枝流の紀伊水道北部への流入勢力が弱く漁況を示したとおり、入込期に当る紀伊水道北部海域全域にわたって例年より1.5~2.5°Cの低水温が持続しその低水温が大坂湾南部まで波及している。従って本年のタイ、サワラの同海域への回遊は約半月程度おくれ現在沼島、友ヶ島水道周辺に達している。反面、大阪湾中、北部、播磨灘東、中部海域における水温値は平年並かやや高目に経過している。現況及び同魚族の内海回遊に関する諸要因を総合すると今年は沼島、友ヶ島水道周辺での滞留期間は短かく、播磨灘東・中部での漁期入りは昨年同様例年より1旬遅れる程度で、初漁が5月上旬後半、下旬に盛漁期を迎えるようになるだろうが漁期はやや短かい。また魚群量については紀南における1月からの漁況などからみて本年の春漁は平年漁を下廻る見込みをたてている。(水試・岩井)



## 強化プラスチックの特性 (1)

### 開発の経過と材質

新しい材料の開発は、日本においては、農産物の新たな産業の展開を暗示する。久しく「木」は、人々の生活に馴染み、その生産手段として貢献した。しかし、その度を加え、また次第に人手で、次第に、人工の一般的な恐慌がひろがり推定されつつある。FRPといふ強化プラスチックと呼ばれるものもその一つである。強化プラスチックの普及が、すでに始まろうとしているとき、あまり知られていないその経過をふりかえってみよう。

昭和四年(一九二九年)ニューヨーク株式市況は空前の大暴落を記録したが、これをきっかけとして、きわめて大規模な恐慌恐慌の波が、いっせいに世界を席捲した。

このような甚だしい不景気の最中、各企業が必死に倒産防止に血なまぐさい努力をつづけているとき、アメリカ合衆国の一ガラス会社(オーエン・イリノイ・ガラス・カンパニー)は研究室の総力をあげて、新製品の開発をはじめたのであった。

すなわちガラスの糸を作ろうというのである。

その頃、ガラスは容器、装飾品、板ガラス等に用いられ、きわめて壊れ易いものという固定した観念もあった。その壊れ易いもので糸を作るといことは、常識からはずれた考え方ではなかった。しかしこの常識からはずれた着想に、この会社はその後、七年間の歳月と五百万ドルの巨費を注ぎこんだのである。一九三八年(昭和十三年)に実用性のあるガラス繊維を作ること成功し、一九四〇年に製造方法の改良をすすめ、一九四二年(昭和十七)に製造方式が確立した。

そのガラス繊維の特長は、最初に技術者が着目したのは、ガラス繊維は細くすればほど強く、なる性質をもっていることである。現在使われている直径八~十三ミクロンのものを使った引張り強さは次の表のとおりである。

種類	引張強さ
羊毛	11.0
綿	34.5
絹	35.0
鉄線	30~60
鋼線	44
銅線	100~200
炭素繊維	50~200

しかし、初期のものは性能が劣るため、構造材としては対象にされず、もっぱら電気部品等に重宝がられていた。その品質も、これら合成樹脂の研究は、その後、すばらしい進歩を遂げ、前記したガラス繊維の製造方式が確立した一九四二年(昭和十七年)には、高度なものが開発が行なわれるに至った。

この一九四二年(昭和十七年)は、その前年の十二月八日に太平洋戦争が起り、真珠湾の襲撃が国民を酔わせたあとに幕を開けた。この年は、マニラ占領シゴポール占領、コレヒドール占領と、いわゆる破竹の進軍を進めてはいた。米機による日本空襲も、米機にしろ、国民の燃気がヒヤリとしたものである。アメリカは、西南太平洋連合軍司令官にマッカーサー大将を起用し、全面的な反攻態勢を固めるための準備が次々に進み、研究、実

産をダイナミックに開始したが、この、長足の進歩を遂げた樹齢と、きわめてすぐれた特性をもつガラス繊維と組み合わせた強化プラスチックの開発も、戦争遂行に欠かせない、新しい構造材として育てあげたのである。

従って、強化プラスチック(「FRP」という。ハガラス繊維で補強されたプラスチックという意味)を別の名で、"Fiberglass" (繊維強化プラスチック)と、アメリカでは呼ばれることがある。

現在、使用されている強化プラスチックの特長はどうか。今後、漁船への応用問題であろうか。にっついては、次回に記すことにした(吉中)

資料：FRPの手引(強化プラスチック協会) FRP漁船研究会報(昭和十三年三月第五号)

ト	ン	未	漁	隻
1	ト	ン	未	142
1	ト	ン	2.99	42
3	ト	ン	4.99	10
5	ト	ン	9.99	3
10	ト	ン	19.99	2
計				199

46年2月1日現在 県水産課資料

## 養魚の調餌と造粒は コウベヒラガのミートチヨッパーで

養魚用ミートチヨッパーNo.32からNo.72まで各種製作しています。又最近の人工餌料需要の増加にともない生魚と人工餌料をよく練り合せ造粒装置付チヨッパーで給餌することもできます。

(脚一報次第カタログ贈呈いたします)

ミートチヨッパーとプレート、ナイフの専門工場  
 株式会社 平賀工作所 神戸市長田区水笠通3丁目8  
 TEL.代表神戸(078)62-1527



